

# ワークキャンプ運動、「ハンパク」、故郷

話し手：徳永 進

野の花診療所院長

聞き手：番匠 健一

広島国際学院大学情報文化学部准教授

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

田 焜 美紀

立命館大学国際平和ミュージアム学芸員

大野 光明

滋賀県立大学人間文化学部准教授

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

本聞き取り調査は、立命館大学国際平和ミュージアムのメディア資料研究会〈戦後社会セクション〉ハンパクプロジェクトの一環として、2021年10月16日に鳥取市の野の花診療所にて番匠、田焜、大野（Zoom参加）が行い、翌日はこぶし館の島田等文庫の資料調査を行った。徳永進氏は、1969年の「反戦ための万国博（ハンパク）」において全国のハンセン病療養施設から届いたはがきを展示し注目を集めた「らいの家」の現地リーダーを務めた。鳥取県での生い立ちから、京都での大学生活、そしてハンセン病回復者の里帰りや交流のための宿泊施設を建設するワークキャンプ運動との出会い、ハンパクへの参加とその後の取組みなどを伺った。

## 1. 鳥取農村の原風景

徳永：1948年4月13日に鳥取県八頭郡こおげの郡家というところで生まれ、9歳まで育って、故郷というところの風景みたいなものが入ります。一番貧しいときでしたし、野原で走り回ったり、遊んだり、悪いことしたり、人の家のキュウリやトマトやイチジク、当然とりましたね。もう自由でしたし、思い出の一番深いところが郡家の9年間でしたね。小さい川にしろ、川辺に生えてる雑草にしろ、フキノトウにしろ、セリにしろ、身近なものとしてあったのであのときの田舎の暮らしが今もってすごくありがたかった感じですね。自然の親和性って大きさですけど、多くの人が経験した時代ですよ。

それから、ベビーブームですからまわりに子供が



写真1 野の花診療所での聞き取りの様子（右側が徳永氏）

多かった。外に出ると必ず誰かがおって遊んどって、はねこ（仲間外れ）にされたり、「隣村とけんかに行く、ついてこい」って、ふだんは悪い親分が隣村とけんかしてるとぱっと助けに来てくれて、急に感謝すべき英雄になったり。誰がええもんだか、悪いもんだか分からなくて。運動会があって、時々思い出すんですけど部落対抗リレーが印象的で、ふだんは勉強ができない豆腐屋の息子にバトンが渡ると、6位ぐらいだったのが彼がだーっと走って上げるんですね。部落ごとにみんな父兄が応援に来てますので、もう大合唱でその日彼は英雄になるわけです。それが終わると、ちょっと寂しそうだった。そういうぎったんばっこんがそれぞれあって、今はそうはいきませんけどね。

父親の仕事の関係で鳥取市に移って、新しい担任に「田舎で勉強できても町じゃ通じんで」と言われ、

あっ何て厳しいところだと。鳥取市の附属小学校[現 鳥取大学附属小学校]ですけどなかなか厳しい学校で、何か間違えたりすると竹でたたかんですね。あるいは自分のげんこつで10回、20回とかたたか指令があって、それを当然のようにやっていました。とにかくすごい小学校時代で、今とは真反対で先生の言うことは絶対です。6年1組と2組でソフトボール試合があったときに、負けると選手は並ばされて先生からたたかれちゃう。軍隊の影響が残ってる時代だったので、勝ってこいと。

番匠：町の方は、どこにお住まいだったんですか。

徳永：鳥取市大榎町<sup>おおえのきちょう</sup>で、家の前は国道が走ってました。歩く範囲に学校があったので、小学校も中学校も高校も徒歩で通ってました。小学校は怖い先生が生物好きで、よく「ギフチョウの餌の葉っぱを取ってこい」と葉っぱを入れるアルミの入れ物を持たせられて、久松山の麓の辺を2人で行かされるわけですね。「神社のこの辺にこの葉っぱがあるから取ってこい」と、それだけ。たたかれるのが普通なので、必死で探して偶然あって、「先生、ありました」、よかったです。朝の時間にみんなが自分の家の花を教室に持ってくるんですね。花の名前を先生は問うわけ。それが答えられんとさっきの頭10遍が始まるんです。花の名前には恨みもあるけど、でもいろんな植物を覚えたりして親しませてもらったですね。

中学校は野球部に入るんですけどね。休憩時間にソフトボールでみんなで遊んどったときちょっと体の大きい人と正面衝突して、鎖骨骨折で使い物にならないので卓球部になるんです。その頃1960年に、夏の夜ずっと走ってね、マラソンのアベベのまねして、これをやらねばならんみたいなことで、はだしでした。ようやく周りの道がアスファルトになった頃でしたね。途中の砂利道だけ草履を履いて、県庁の周囲をずっとひたすらはだしで走るわけです。マラソン大会の日、バスケット部とか、バレー部とか、陸上部とかの選手でよう走る人がおるんですけど、卓球部の自分は予想には全然上ってなかった。前を見るとバスケット部の2年生の子がおってその人を三差路で抜くんですね。ほんならもう前に誰

もおらんでね、中学3年のマラソンは1位だったんですよ。ゴールしてやったーと思ったら、進学に熱心な先生方がぱっと来てね、「徳永、無理すんな」って。ようやくたなって褒めてくれずに、「そんなマラソンばかり力入れとる場合か」と。あれはおかしかったですけどちょっと印象的だね。

高校に入ると新聞部に入りました。受験学校だったんですが、高校は受験教育だけやるとればいいのかと、顧問の濱崎<sup>1)</sup>先生が私たちに火をつけた。ほんで先生の言うなりに、そうだ校長は許せんみたいなことで。その頃から、新聞部を通じてやや反体制的なものの言い方を教えられました。

田畝：濱崎洋三先生は鳥取では名物の先生で教え子は皆さん慕っておられます。鳥取西高校は藩校に由来する由緒ある高校です。

番匠：勉強はできたほうなんですか。

徳永：勉強、まあまあできてたけど、根本的にはできてないな。西高も硬式野球がその頃強かって、伝統校だって応援団もしっかりしとって、私たちの学級は50人中で13組か14組あったかな、1学年で700人ぐらい生徒数がおったんでしょね。3年合わせると2,000人近かったと思うんですけど応援練習というときに、応援団がすごい怖いんですよ。初めびっくりしましたね。

高校のもう1つ向こうの谷に<sup>おうちだに</sup>樗谿神社というのがあって、そこを友達と歩いたら別の高校の生徒に取り巻かれて、「100円貸してくれんか」ってからまれたんですよ。

番匠：カツアゲですか。

徳永：そうそう。ほんで100円ずつ出したんですが、出すときに、「いつ返してくれますか」って聞くわけ。「来週の月曜日、大丸(デパート)の屋上に来い」って言うんです。後で考えたら、ちょっと待てよ大丸って月曜日定休日だと。もう許せんという気になって、ほんで、あるところまで追っかけてたんですけど、どこかに逃げた。その迫力がすごかったので、弁論大会にそのことをしゃべったわけ。そしたらストーリーが面白かったんでしょね。1年生だけど優勝してね。しゃべり方も工夫したんですよ。本当は腹が立ってるんだけど、ちょっと面白く。

そのことがあって、1年か2年か忘れたんですけど、学期が始まるときに、学年代表として挨拶するように言われてですね。「自分たちは先生から聞いて習うだけの受け身的な立場だけでなく」というようなこと、たしか「無機的な存在ではなくもっと有機的な存在として、生徒としてあるべきではないですか」と言った。そしたら恩師だった1年の学年主任が来て、「おまえが言ったことはすごいことなんだ」という話を聞かされ、私自身は言い過ぎた、言葉が滑ったって思ったこともありましたね。

## 2. 家族について

徳永：何で今でもその言葉を思い出すかというと、高校生のときから母の影響だなと思うんだけど、「人の役に立つことをしんさい」みたいなことがしっかりあった。母がなぜ私にそう言ったか後で考えると、満州で長男を亡くすんですね。着のみ着のまま、長女と次女、兄貴を失って帰って、私が生まれたときに亡くしたその子の生まれ変わりだみたいな気があって、それで八頭<sup>やづ</sup>教会で洗礼を受けたりして生きて帰れたことも含めて自分の支えにした。えらい迷惑ですけど。

おやじはだらしない人でね。地方史、歴史の先生だったんですけど、濱崎先生と同じように県史の最初のまとめ役をやったんです。前の晩はちょっと飲んどって、鳥大[鳥取大学]で授業をする前に酒が残るとるわけですね。授業を始めると、「先生それ先週聞きました」って生徒に言われて、「すまん、すまん。二日酔いで酒が残るとる」って。日本史の先生と言われずに、日本酒の先生って言われてたという冗談があるぐらい、だらしなかった。「おまえの好きなことしたらいいが」というのが父の意見で、母は「人のために生きなさい」と。どっちかというとなら父のほうが対応しやすかったですね。

そういつたときに、「だらしない人というのはええだぞ」って友達が言ったんですよ。普通、私たちはだらしないは価値を低くするのでしっかりしろと言われますが。何でと言うと、「だらしない人は差別せんわいや」って。本当にびっくりしましたね。

父と母2人とも、私は仕事柄看取るんですけど、

父は家で、母はこの診療所で看取らせてもらいました。時間がたって思うと、母が言っていた「人のために生きなさいよ」というのは残るんですね。父のことはもちろん、「好きなように生きたらいいが」というのも同じように残るんですけど。その言葉をよくぞ言い続けてくれたなと、逆に感謝が起こるんですね。あれは私を束縛する言葉とずっと思ってたんですけど、生きてみるもんだなとか、言葉というのは変わって別の姿が見える。

母は兵庫県美方郡浜坂という小さい港の呉服屋の娘、お嬢様だったらしいんです。山陰海岸もずっと好きです。郡家の田舎のことを言いましたけど、山陰海岸も大事な風景の1つです。別に見てるだけで、漁とか釣りとかはしないですけど。鳥取にいて不満はないです。月はあって、金星はあって、木星はあって、海はあって、草木はあって、裏山、神社の山があって、恐らく大体がある。全てとは言えないですけど。オーロラはない。ないものはあるけどでも、大きな自然のものはあるというのが、この土地です。

郷土愛という言葉がある。ある意味でちょっと問題がある言葉で対外的に国粋主義みたいに言われる言葉で、ちょっと恥ずかしいところもあるので言いくいんですけど、私にとって自然に郷土愛は育って自分の中にあつたなと。

番匠：野の花診療所の十戒に、「世界のSOSに手を」とありますね。

徳永：それは重要なことでね。国際ニュースを聞くと、アフガニスタンにしろ、シリアにしろ、ミャンマーにしろ、中国の地域にしろ、とんでもない事々が当然のように起こってますね。平和の真反対を日々生きている。どうやって私たちは力になれるのかと思うんですけど、実際には日々のここだけをやって終わってるんですけど、あそこはどうやって通じていけるだろうと思って。大きな機関はありますが、中村哲さんみたいにちゃんと個人的に救うコネクションもあって、もっともっとおびただしい出来事と手をつながることとか、まさか全てを笹川財団に頼むわけにいかんしね<sup>2)</sup>。それがどうやったらできるんだろうということを思いながら、

日々がたっていきます。

番匠：お母様は満州に行かれていますか、ご結婚は引き揚げてからですか。

徳永：いえ、その前に鳥取で結婚してたんです。

番匠：お2人で行かれたんですか。

徳永：ええ、父が教員で満州のハルピンに派遣されるというので。

番匠：ハルピンではどれくらい教えられてたんですか。

徳永：数年だと思います。そこから命からがら帰ってきて、父親は八頭の女子師範〔鳥取県女子師範学校〕の教員をしておったんですね。みんなで校庭にサツマイモをつくったりして。その頃の教師と生徒のつながりというのはとても深くて、それは寄り添うというようなもんじゃないです。一緒に鋤持って、汗流して。ああいうときに寄り添うという言葉は生まれんわけ。寄り添えなくなったときに捏造のようにしてつくられて、コミュニケーションを何とかしようとする、うそ言葉ですよ。実際に寄り添ってるとい現場では、そういう言葉は生まれません。みんなで食べ物を一緒に食べてという満足感や達成感があったりして、教える側と教えられる側が一体化できた時代だったんでしょうね。

番匠：八頭町にはお父様のご実家があったので、引き揚げてこられたのでしょうか。

徳永：父は一匹狼みたいところがあって、自分1人で親の世話にならずに東京に行くといつて、親の仕送りをなしに武蔵高校に行くんですね。父の兄弟は、1人は共産党で牢屋に入るとるのがおるし、1人は親の材木屋の跡を継いで、材木屋が失敗して倒れて飲んだくれになった弟がおるし。父は東京で自分が書いた文章を読んでほしいと、大胆にも島崎藤村を訪ねるらしいんですね。藤村先生に会ったというのが自慢話で、それを読まれたかどうかは知らんですけど、その頃かぶれたんでしょうね。京大で日本史を学んで、いずれ鳥取大学の教員になるというような感じで。父の流れの中で僕も鳥取というのを感じとったんでしょうかね。

母方のいところが浜坂におったんですが、岡田兵衛という人です。彼が、「おまえ一人で大学に行つて

ええと思つとるんか」と、車で約40分離れたところから鳥取に来ちゃうんです。「わしは農業と牧畜をして、自分の浜坂には戦争で親を亡くした子がおったり、家族がうまくいっとらん者もおる。そいつらを集めて劇団をつくって、劇をしながら共同体をつくって生活したいから、おまえも入れ」と。「その共同体の名前は「日本海の白い波」と決めてる、ごつええだろ」と言つて。ほんで「劇団員になれ。なれんなら、おまえ、医者になつてもうけた金をこの劇団に出せ」つて。大した名前じゃないなと思つたけど、気持ちは今だにその延長線上にあるんですね。

兵衛には小児麻痺で足の悪いお兄ちゃんがいたんですけど、あんちゃんを迎えに行くといつて、浜坂のある通りのセンターラインをぼっとオーバーしたときに、向こうから来たトレーラーとぶつかつて24歳のときに即死するんです。私は京大の1年生で体育の時間で、20歳ぐらいだったのかな。山陰線に乗つて帰つて浜坂駅に着いて行つてみると本場で、彼が亡くなってました。

私の心の中に幾つかの言葉があつてね、亡くなつたときこのときは、「あとのことは僕が引き受ける」と心の中で言つたんですね。その時、号泣しましたね。だいたい薄れてきましたけど、何をすればいいのかなといつのが、今も残つたまいます。

番匠：兵衛さんのことは『病氣と家族』にも書かれていましたね<sup>3)</sup>。

徳永：彼の似顔絵が描いてあつたりしたんですけどね。郷土愛といつるか、父・母の育んでくれた郡家もあるし、ちょっと離れた海辺の町から来るいところが持つた郷土といつのがあつて、さっき全てがあるといつた背景にはそういうこともあります。

### 3. 京都での学生生活

番匠：京都では最初は高木町〔京都市左京区下鴨高木町〕、その後、北白川〔京都市左京区〕の方で浪人生活をされます。浪人生の頃から奈良のほうにワークキャンプ<sup>4)</sup>に行かれてたんですか？

徳永：高木町は兄貴で私は最初から北白川です。浪人生のときは京大農学部食堂と、関西文理といつ

予備校と、自分の下宿と、ときたま銀閣寺のパチンコ屋と、そんなんです。ワークキャンプの矢部さん<sup>5)</sup>という先輩も浪人のときは、「徳永君、パチンコをさせていただろうけど来年頑張れよ」と言ってアドバイスするぐらい、浪人に徹していました。

番匠：医学部に入学されてから、どれくらいの頻度で行かれてたんですか。交流の家は完成されてたんですよね。

徳永：京大には1968年入学、1974年卒ですが、月に1、2回だと思いますね。囲碁将棋大会といって、関西の大学のクラブと長島愛生園<sup>6)</sup>の囲碁将棋部の人たちが戦うときの準備に前日から行ったりしていました。終わった後に交流会で初めて長島に行かせてもらったんですが、そのときにびっくり。

番匠：ワークキャンプの運動にのめり込んだことですが、交流の家以外での活動もあったんですか。

徳永：何かの女性の施設のペンキ塗りみたいなのか、校庭というかグラウンドの草取りみたいなのか、幾つかありましたね。西宮に行ったり、兵庫県の篠山に行ったり、キャンプサイトを時々変えて動いてましたから。でも長島のことが一番大きいですかね。自分たちも鳥取に帰ってきたときにボランティア団体が援助できるところがないかなとあって、こども学園〔鳥取こども学園<sup>7)</sup>〕とか同じような方法で行かせてもらってましたね。あのときは学生運動というのがあるし、ヒッピーみたいなものもあるし、それにボランティア活動をやるとか、音楽をやるとか、幾つかパターンがあって、それぞれが分からないなりに熱が入ってましたね。時代の1つの雰囲気でしょうね。決して自粛してないというか、ステイホームしない。みんな、それが安心できたんでしょうかね。

番匠：大学の実習が始まるまで、授業の方はどうでしたか。

徳永：教養部というのは意外と時間があって、3年になって学部が始まりまして解剖実習があったときに何でこれ1年目にさせてくれんと思って。迫力あってどきっとして、こういう方向の仕事に関わりたと思って、解剖実習はありがたかったですね。

番匠：当時の京都大学の雰囲気は、どうでしたか。

徳永：学部時代は下宿はずっと北白川です。4畳半で6,000円だったか、4,500円だったかも。仕送りは2万でした。結構学園紛争がまだ頑張っていました。同級生とか放水さらえながら連れていかれる人もおったりして、彼は京都の進学高校出で言葉が非常に優れとった。鳥取の高校生と大阪、京都の高校生は全然レベルが違ってね。本をしっかりと読んで読書量も違いますし、きっちりしゃべるしね。放水されて占拠していた時計台から下りていくんですけど、あいつはやるなと思ってね。逮捕されとるんですけど、やや尊敬の念というか。永遠に医者をやめて困った人民のために人生を尽くすと思ってたらあるとき授業に戻ってきて、何で帰ってきたんみたいな感じで。あれだけ激しく革命について語ったけど、医者のほうに戻るんかと思って。あのときの落胆と安堵感みたいなのがちょっとありましたね。

党派はそれぞれあって、クラスの中でも何々派、何々派と。そんなにぎくぎくはしてなかったです。私がハンセン病の人の募金をばっと回すと、党派関係なくみんなあちこちで入れてくれたりして、それを持って行って渡したりしてました。雰囲気は同じように自由でした。ピアノを弾くやつはずっと弾いとったし、山岳部のやつも山行ったりして。でも、会合のときはみんなが結集してきました。大体パターンが決まってきましたね。トランプカードと碁と、それから山岳部と音楽系の人と。面白いんじゃないですかね。同級生がもう結婚して、お子さんを連れてるお母さんもおったしね。大学を1つ卒業してそれから入ってきた、碁打ってるお兄さんみたいな人もいたし、もう一組は学生になってから結婚して、もう一組、仲人を私たちにさせてもらったりして。そのとき私はもう既に結婚してたんですね。私も意外と早めに、学生時代に結婚しました。

岩倉に住んどった5年生の時かな、子供ができるんですけども、出産が4月28日の夜でね。その産科病棟というのはまるで野戦病院みたいな感じで、今の高級産科医院の一室みたいなじゃなくて、ばーっとカーテンで仕切られたところで、私はそこにごさ敷いて寝るの。その明る日が4月29日で天皇誕生日ですね。別にそれが嫌いというわけじゃ

ないんだけど、何となく4月28日のうちに生まれてくれて、それで生まれたんだけど、股関節の脱臼があったのを見つけてくれたのは、タイから来てる研修医だったかな。いろんなところで誰が誰のお世話になるか分からんなという感じでしたね。

それで名前を<sup>かい</sup>權にしようと思って。貝殻<sup>かい</sup>節<sup>せつ</sup><sup>8)</sup>が好きだから、櫓<sup>かき</sup>權の權の字。左京区の役所に届けに行ったらこの字は名前には使えませんかと言われてね。仕方がないんで貝殻の貝にしたんですけど、本当は櫓<sup>かき</sup>權の權のイメージが好きだったんです。結婚してたから、学生生活でも生活費のため何か家庭教師もやってたんでしょう。ちくわが20円のが18円のところがあってよく買いに行きました。單車使って行くからガソリン代を入れると、傑作ですよ。

#### 4. ワークキャンプ運動からハンパクへ

番匠：ハンパクではどういう経緯で総リーダーを務めることになったんですか。

徳永：ハンパクは69年、2年生のときだね。ワークキャンプとしては、ハンセン病だけがテーマではなくて、キャンパーの中にも障害者の施設をバックアップするとか、いろいろあったんです。ハンセン病の問題を特に気にしてる人がおって、ハンパクというのがあるらしい、テーマは何でも出してもいいらしい。万博に反対するもので、そんなやつとっていいんかという反体制的なニュアンスがあると。ベ平連 [ベトナムに平和を！市民連合] が中心に何かやるみたいだと。その店の1つに出してみようかということになって、ほんで、じゃ、やろうと。

この思いつきは私だったか飯河夫婦<sup>9)</sup>もいましたので、そこにいたメンバー、誰の案か忘れたんですけども。現に今療養してる人がどういう気持ちを持っておられるか、それをはがきを書いてもらって、展示してみるのはどうだろうということになって。はがきを全国の療養所に配付して、それを返してもらって、あるいは誰か近くにおる者がまとめて預かりに行ってもいいしということで、当てずっぽうにやってみたんです。交流の家でも前例はなかったと思うんです。

その頃はまだ患者さんも若かったし、いろいろ差

別の中でこんなんでいいのかと。今、平均年齢88歳ですけども、その頃は平均年齢が40歳前ぐらいの方が多かったと思いますね。なので、元気あるし、何で俺らこんなところにおらないけんという怒りもちゃんとあったときで。返ってくる反応もやっぱり故郷に帰りたいとか、「お母さーん」とか、差別は許せないというようなトーンが多かったと思うんです。ほんで、切実な感じが短い字数の中にあたりして、こういうことをみんなが知っとかないかんわな、ということで展示しようということになった。

ワークキャンプは、一輪車持ったり物をどんどん建てたりするのが得意ですから、学生だから大したことないんですけど。コンパネをごそっと積んで、家というほどではないですね、倒れんというぐらいのものを建てて屋根をつけて、中に針金をびゃーっと通して、そこにはがきをべっぺっぺっぺ貼っていく作業なんです。大ごとではないけどそれなりの空間をつくりますから、雰囲気はあったですね。それをだーっと並べて一応できた。それなりの入り口があって、はがき貼ってそれをみんなが読んで、出ていけるという格好にはなったんですけど。コンパネだからちょうどいいように汚いし、中に書かれているのが、「わっ、本当のことかー」というような内容のはがきがあったと思うんです。ハンパク自身は、そういう政治的なメッセージをどこかで訴えようというのが1つの柱だし。もう1つは、それが音楽でもいいし、アートでもいいし、その他の差別問題が夜店みたいにいろんなものが入っていて、ただ反体制的なものというのでは共通してた。

ここが私は面白いなと思ったんですけど、キャンパーの誰かが「このはがきを売ったら」と言うんですよ。こんなもん誰が買うんという思いもありましたけれども、1人の大事な声を人に売るといって、そこでお金が発生するみたいなことは、ちょっと失礼じゃないかという感じもあったんですけど、全体に広がらなくても本当にその1人の心のなかに言葉が届けば大きなことだということもあって。何枚売れて何円収入があったのか、忘れたんですけど意外と売れたんですね。これも面白かったなと思ったんです。

鶴見俊輔さんが来ていて、鶴見さんも小田実さんや吉川勇一さんもいたと思うんですけど、主催者のほうにいらっしやっただけ。ほんで、これいいってすごく喜ぶわけです。鶴見さんは感激屋さんだからね。伝えたい言葉の世界がすごいと思われたかもしれません。鶴見さんは本当に全てのことを肯定的に、全てじゃないな、政治に対して以外、いろんな文化、小さな工夫とかはみんな肯定的に拾えるすごい能力を持っておられて、喜んでくださったというのがありますね。

その後、ハンパクは終わるんですけど決起集会のようなのがあって、最後に御堂筋か何かにデモを打って出ると。いろんな夜店に出た人たちも、前からのベ平連の人たちもデモに出て、自分たちの気持ちを訴えようというときに、私はちょっとそんなことやっとなんかええんかいなと思って。「一人一人の困ってる人の意見とかが大事で、スローガンのにわーっていつちゃうと、何かそれで済ましていいんでしょうか」みたいなことを言ったんですよ。主催者は、「それは分かるけれども、デモをやっていくのは別の意味がある」と言う。ハンパクということで精神的なアピールをしたいという気持ちがあったでしょうから。結局デモは実行されるんですが、私たちは勝手にすればというんで片づけて帰るんですけどね。ただ、ハンパクそのものを否定的に思ったというんじゃないで、自分たちの役割は、こういう声を療養所におられる方の声を届けるということまでが役割だと思いました。わっせわっせとかいう言葉で何か訴える時の言葉の質はちょっと別の世界でもあったなと、今思うんです。

番匠：多くの参加者が御堂筋デモに流れていくなかで、集会後もデモに行かず残って討論をつづけた方々もいたようですね。

徳永：それはそれで平和な感じですよ。例えば香港のときのように、誰かが何かを必死に訴えてみんながそうだって言って動く。制裁を受ける、収容される、そして若者たちも途端に発言が抑えられていくということに、ハンパクのときは直面しなかったんですけど、当然あり得るんですよ。あり得ないようにしとかなないといけないですけども。ミャン

マーの動きで見ても反を唱えるときに命を失うとか、収監される、自分の人生のどこかを不自由を強要されることを考えるときに、ハンパクの頃は自由でしたね。遊びだったんじゃないかと言われると、そうでしたみたいな感じなんですけども。

命をかけてる反対行動は、本当によかったか。命をかけた人たちは殺される、殺しということもした活動がいろんなところにありますけれども、それがより優れた運動をして私たちの及ばんところで見事なものをつくられたかという、そうとも言い切れない感じがあるんですよ。どんだけあそこで平和をつくり上げられたかというときに、難しいんだなという感じがありました。命をかける狙われるし、抑えられるし、そこで終わっていくというもある。それを避けて温和な方法であんまり力にならずに、こわごわ日和りながらやっとなんかというのもある。正義は貫くと、それ正義でないことも多いんですけど、そのとき正義と思ったもの、自分が思ったものを貫くと、衝突という現象が起こって両方が崩壊したりすることもある。お互いの正義がぶつかることの後の現象って、よきことなのかどうかというのが難しいな。ハンパクでは、らいの家は店を閉じて、軽トラックに載せて帰った、ということです。

番匠：ハンパクに訪れた人の中で、らいの家がものすごく印象に残ったという人が多かった。何か伝わるものがあつたのかなと思いました。

徳永：ありがたいことですね。細かく思い出すことはできませんけど、印象としては、大切な言葉というのが沈殿してて、でも、それって拾えないままあるもの。日本にも世界にもあるというように思ったんです。

2017年だったか、ハンセン病の療養所の入所者数が1,500人を割ったときがあったんですね。私たちが療養所に行った頃は1万人ぐらい<sup>10)</sup>、もったか。1968年、1970年頃の日本のハンセン病療養所入所者数、それぐらいいらっしやっただけの人が5,500になり、4,400になり、1,500人までどんどん減っていったんです。このままだったら入所者の人が亡くなる、消えるという。その前にどういうことを思っておられるか、もう1回聞こうと思ったんですね。

その思ったきっかけは、ハンパクの「らいの家」だったんです。あのときに生の声がちゃんと出たので。

結構な人が書いてくださって、今の気持ち、次の中で該当するのに丸してくださいって、①差別、許せない、②許します、③お母さん、④故郷に帰りたい、⑤あきらめている、⑥ありがとう（感謝）、⑦さようなら、⑧呆けたくないな、⑨この病気のおかげ、もあります、⑩年取って、何が何だか、わからないと、10項目を並べた<sup>11)</sup>。何でこんなふうにしたかという、もちろん終生隔離、強制ですから許せない、差別許せないという方、今もってもちろんあるだろうと思ったんですけれども、許しますというところが何かで出てくるだろうかと思ったんです。がんで亡くなる人が最期に家族に言う言葉の中にあるのが、ありがとう、許してください、許します、愛してます、さようならなんですね。この5つが欧米で言葉にされる別れの言葉と言われてるんです。その後、日本政府は丁寧な介護とか補償とかをして、それなりのバックアップをある時からするようになったので。割合は、許せないといった人が58%、許しますが13%、お母さんが16%、故郷に帰りたいが20%、もう諦めているという人が35%ですね。ありがとうは言うかと思ったんですけど、43%、意外と高いですね。それはよくここまで不自由な体を日々暮らすのにバックアップしてくれた。がんの末期に言うさようならという言葉も多いと思ったら、7%。8番のぼけたくないが33%。高齢化が進んでみんなが認知症になっていくんですね。自分もそうなるかなと思って、一番怖いのはそれだということですよ。社会と同じように、ハンセン病にかつて病んだという人の中でも、認知症になりたくないが33%。この病気のおかげという、病気をマイナスにばかり捉えずにクリエイティブ・イルネスの1つにハンセン病を入れる人は16%。何が何だか分からへんというのが11%で、私個人としては面白い答え方の返事だったなと思うんです。社会やみんながその人にこういう答えのさせ方をしたということも考えんといけんですけれども、こういうアンケート取ろうとしたのは、ハンパクのときの

らいの家からもう一歩時間がたったときにどうだろうと。あんまり元気なときのエイエイオー、許せんぞという力とは違うものが時々起こってきて、それはそれで教えられることかなと、そのとき思ったんです。

番匠：面白いですね。ハンパクのときにハガキを準備されるときは、交流の家で皆さんで宛名書の作業をして送ったんですか。

徳永：それぞれの園に友達みたいなのがあって、33人。一々個人に書くんじゃなくて。療養所の患者自治会とか知ってる人にぼーんと渡して、じゃ、誰々さんに書いてもらってって、向こうでそれはやってもらう。交流のある人には、その人に書いてみたい感じで渡すと、よっしゃ、分かったみたいな。無理だという人にはもちろん渡さずに、書ける人とか、口でしか言えん人とか、でも、気持ちをしっかり持ってる人とかに渡しました。

番匠：ハンパクへの参加の経緯には、ベ平連とのつながりがあったのですか。

徳永：ほとんどないですね。鶴見さんがベ平連の活動してるのは知ってるので、鶴見さんの言論とか、発言とか、あるいはこの交流の家への支援とか、ハンセン病との出会いは鶴見さんの同志社での授業がきっかけだったので。たった1つの授業から動いたことなんですね。ロシア人の知人のトロチェフが東京のYMCAに来てホテルに泊まろうとしたら、どう言っても宿泊を拒否した。鶴見さんが京都に帰ってきて授業でそのまましゃべったら、聞いている生徒がはーっと怒りの共感を得た。1人の人間の受けた感情がそのまま発されると、教育の場であったわけですけど、言葉の勢いとか内容がばちっと伝わるんですね<sup>12)</sup>。

濱崎先生の授業でももちろんあるし、私はハンセン病の話のときにはいつも言うんだけど、同じ鳥取西高校の国語の授業で、古田恵紹<sup>えしやう</sup><sup>13)</sup>という先生が、「幼くて らい病むいわれ聞い詰めて 母を泣かせし 夜の天の川」って大きな声で読んだんです。たったそれだけです。もうびびっとさぶいぼが出て、これは何ちゅうことが日本にあるんだ、と。ハンセン病に遭ってもないし、強制収容も何も知らん



のですが、「この人はらいを病んどりましてな」と、「そっちに夏祭りがあるから、行くと行って、おまえは行ったらいい。何でお母ちゃん、僕は行ったらいい、みんなは行くとるのって言ったんでしょね」と、状況を自分で思ったように解釈されて、それだけですけれどね、心に残りましたね。

鶴見さんがトロチェフさんが宿泊を拒まれてみたいなことも、授業を受けた側もこれは違う言葉だって分かる。言葉は本当に魚みたいな生き物で、冷凍じゃなしに生で動いてるやつは、ばばばって言葉は泳ぎ届くんですね。鶴見さんのベ平連のことも違和感がなく思ってる。私は具体的に脱走兵を守るとか、そういう運動なんかには全然入ってないですね。

番匠：鶴見さんは、交流の家にもよく来られたんですか。

徳永：<sup>おおやまと</sup>大倭紫陽花邑という1つの神道の宗派なんだけど<sup>14)</sup>、鶴見さんはあそこにも面白いねってというので、鶴見さんは好奇心の塊みたいな人ですから。

番匠：ハンパクとのつながりは、鶴見さんのゼミに出入りされてた方から広がったんですか。

徳永：木村聖哉。もう1人、キャンプのリーダーで柴地則之<sup>15)</sup>（通称ダンちゃん）がおって、その人がハンセン病回復者の社会復帰のための家を建てようと言い出した。鶴見ゼミの生徒です。矢部さんは下宿が一緒だったので。今度『NAGASHIMA～「かくり」の証言～』<sup>16)</sup>という映画ができて、上映会をぜひ広めてくださいと言っていましたね。

## 5. ハンパク会場にて<sup>17)</sup>

番匠：鶴見さんが『「むすびの家」物語』に、ハンパクに行くと徳永さんが炎天下のなか、独りで座っていてずっとテントの守りをしてると書かれてたんですけど。ワークキャンプからどれくらいの人数が行ったんですか。

徳永：6人ぐらいです。みんな政治的なことが苦手な人で、皿洗ったり、つくったりとか、そんなのが好きな人です。たまたま鶴見さんが来てくださっただけで、交代でやっていました。

番匠：そこでは自分で行かれた長島愛生園の話をお

客さんにお話ししたりしましたか？

徳永：言わへんですよ、何も。売ってまーすって入ってくる。ほんで、はがきの言葉のほうがやっぱりちゃんと力がありますからね。

田鍬：ただ書いてもらったようなはがきだったんですか。

徳永：そうです、自由に思っていることを書いてくださいよ的な感じでした。

番匠：このときは京都の下宿から通われてたんですか。

徳永：そうですね。交流の家に泊まったたかもしれません。

徳永：（ハンパク当日の写真を見ながら）これは話題になっとったね。

番匠：京大の西部講堂でもパフォーマンスをしていた万博破壊共闘派ですね。

徳永：いろんなのがありますね。こういう風潮をつくっていける時代、世界の風潮もあったでしょうけど。

番匠：写真2の「らいは治る」の看板を持つてる人たちは、ワークキャンプの方でしょうか。

徳永：それちょっと誰か分らないのですよ。でも、面白いね。ベ平連のデモに「らいは治る」って。何でもオーケーやったんやね。このでたらめな感じが。

番匠：ハンパク会場には鳥取からきた米子ベ平連のブースもありました。「らいの家」はちゃんとした建物で結構大きいですね。

徳永：みんな建てられるんだな。今見ても、結構長



写真2 ハンパク会場での集会の様子（撮影 倉田光一）



写真3 ハンパク会場での「らいの家」の様子（撮影 倉田光一）

いスペースをつくられている。

番匠：写真3で映ってるものが建物の内部の全体ですか。

徳永：残ってる空間があるので、もうちょっとあった感じかな。

番匠：どういうふうにしたんですか

徳永：パネルはそういう格好になっていて、意外と簡単にできると思うんですけど。そこに針金をびーんと1回ひもを張って、ただそれにセロテープでぺっぺっぺっぺ、あるいは洗濯ばさみかな。

番匠：資材がかなりありますけど、軽トラか何かで交流の家から持ってきたんですか。

徳永：軽トラか、4トントラックかもしれませんね。造るとなると、好きな人がおったのでね。頭は使わない人と、頭を使う人とがいて、金を出す人はあんまおらなんだな。

番匠：全部で何枚あったんですか。

徳永：それは分らんだらうな。でも、貼って見れるだけの分はあったんだなという感じですね。

番匠：写真にある「拝啓 国家様」というのは、徳永先生が書かれたんですか。

徳永：いいえ。はがきを幾つかに分けたんでしょうね。面白いね、「拝啓 国家様」って。分類はちょっと忘れちゃったけど、何回か繰り返し読んで例えば家族とか、病気のこととか、国家とか、故郷とかに分けたんでしょうね。実際に出して、書いてくださった人が現実のハンセン病を病んだことのある人というところが、筆自身はその人の筆である場合と、看護助手さんが代筆してるというのもあるのですけ

ど、雰囲気は出てましたね。全部が粗削りのまま、ばーっと展示してるから。

番匠：次のコーナーには「戦争」と書いてるんですけど、戦争に関するものが多かったのでしょうか。

田歙：聞き取り<sup>18)</sup>のほうでも書いていらしたけど、戦地で罹患して戻った方たちですかね。

徳永：実際に従軍した人もおられるのでね。残りのはがきは、しばらくは交流の家にあったかもしれませんが。交流の家が今後どうするかということは、またみんなが考えるんだらうけど、ずっと続いていかなければならないのはかなり無理があって、終わるといことも選べにくい。そこが難しいところですね。でも、次の何かにつながる場合もあるから。

番匠：ハンパクでは、他にも当時の障害者運動とか、公害であるとか、高度経済成長の裏側にあった様々な問題を問うていました。ベトナム反戦という大きいテーマもあるわけですけど、同時に日本に遍在するいろんな問題が一堂に会する場でもあったのかなと。

徳永：そうですね。そういう意味では、何でもよかった。そういう問題を持っている者は全部フリーパスで入ってましたね。

番匠：展示で印象に残っているものってありますか。

徳永：全然なくて、ないというより、自分の頭の中でもそんな時代ですから。ああ、こんな音楽弾いてるわとか、こんな行動取ってるんだというのが違和感なしにありましたから。

## 6. 近代化のなかのハンセン病

大野：ハンパクはベトナム反戦のための反戦運動の博覧会ということと、翌年に控えた大阪万博への反対ということ、文脈が2つあったんですけど、徳永さんや皆さんにとって、ハンセン病の患者たちというのは、当時の時代の何を象徴するようなものであったか。また、ハンセン病に関する展示はハンパクの中でどういう位置を占めたというふうに今から振り返って思われますか。

徳永：近代化していく国家の中でいろんなものが取り残されている1つは、ハンセン病の人たちだったというのが最初からありまして。まず強制収容しよ

うとしたときも、祖国浄化・富国強兵という時代にハンセン病の人たちはそぐわないというのがあって、強制収容の大きなきっかけになったと言われとって。ハンパクの頃もまさにそうで、国家としては見せたくはないものの1つですよ。そういうことに対する、こちらの抵抗というがあるので、万博に対するというのがないわけでもないし、同じ構造で国家が大なたを振るおうとするようなものにベトナム戦争があった。何かの機会にそういう現実をみんなに知ってもらふ必要があるぐらい、療養所の人たちは息を潜めて陰の中で生きておられるというのは事実だったので、何とも許し難い出来事。つまり元の故郷に、あるいは町の中に帰って生活してもらう、それが普通じゃないのかと思うのに、ずっと閉じ込められたまま、もう近代化していく社会の中でさかさまに刺された杭のように見られるという感じがずっとあるんですね。近代化という方向の真反対の土の中に刺された杭であるという。葬り去られていくということに抵抗したいというのは、その頃は特にありましたね。

じゃ、今はどうなるのといったら、さっき [ハンセン病療養所入所者数が] 1,000 名を切るというようなことを言いましたが、その葬り去られた人たちが自然に亡くなっていくわけですね。強制収容された人たちがいない時代になったとき、あれは誰が解決させてくれたかという、これは解決ではなく消滅だと言われていて、その消滅ということに対してどう考えるかということです。今もって近代化の犠牲になって、幽閉され、自粛させられた人たちのことを考えていく必要があるなというところですよ。

その人たちがもういなくなられて発言がなくなったらどうするというと、1つだけあるのが納骨堂なんですね。各療養所に骨がずっとあって、そこは明かりがもっておって、納骨堂というところに生きてられるという形になっちゃうんだけど。そこの守り人、灯台守みたいな感じですけど、納骨堂守みたいな人を誰がどう継ぐのか。あるいは、もうブルドーザーで全部ばしゃっと納骨堂も倒して、あれは過去のことで、もう日本ではありませんでしたにす

るのか。その最後のとりでとして納骨堂の明かりをとす人をどういう形でつくり続けるのかということが、交流の家のメンバーの1人としては考えてるところですね。

近代化を進めるというものに対する、それと違う代表として生きておられる方々を考え直すきっかけにしたり、考えのためだけではなく、事実をちゃんとみんなが見つめる必要があるというような感じでしたね。

大野：60年代の後半というと近代化の中で差別されたり、存在を否定されてきた人たちには、ハンセン病者に限らず様々に光が当たっていた。例えば京都の文脈ですと、被差別部落や、在日コリアンなどに関心を寄せる学生も多かったと思うんです。そういう中で徳永先生がほかならぬハンセン病に関心を寄せたのは、やっぱりお医者さんを目指していたからなのでしょう。

徳永：下宿の先輩に医学生なら来てみたらどうだと言われたけど、それは関係ない。出会ったときの後遺症の変化というか、人間が人体としてこんなふうに変形してなお人間であるという、そこが一番大きかったですかね。いろんなものを失って、失って、失って、それで人間をやると言われるインパクトが強くて、それは形態なんです。指とか、足とか、眉とか、唇とかという、後遺症と言えれば意外ときれいな言葉で終わるんですけど、大きな偏見を身に刻みながら生きていくという、人間というそれは定義の中に入るわけですけど、そのことのインパクトが強かったというのがあります。在日の人とか、同和地区の人の受けることもやっぱり悲しい出来事ですから、それはそれで全く同じに感じる場所もあって、心の変形というのをみんなが持たせられているので。療養所に行きますと、同和地区の方も在日韓国人たちもいらっちゃって、重複されている方々もあったので、これを選んでこれということじゃなくて、目の前にあったそのことを感じていったというだけなんですけどね。たまたまインパクトが強かったというか。頭でというより、やっぱり目とか、そういうもので届いたものの大きさに圧倒されたというところでしょうか。

大野：生身の人間同士の、直接的な出会いが大きいわけですね。

徳永：そうですね。頭で感じる大きな差別感というものと、目とか触覚で感じる差別感があって、ハンセン病の人たちが受けてた差別の構造の中では、身体的な変形というのが大きいですね。医者だから感じたかというのと全くそんなことないですよ。

大野：キャンプでの、言葉よりも行動でというスローガン — これも言葉ではあるのですが — にすごく共鳴できたという点と今のお話はつながるような気がします。当時の学生はいろんなものを読んで、思想から入ったり、理論から入る人も多かったと思うんですけど、そうじゃなくて、生身の人間として強烈なインパクトを持ったことに正直に反応していく、そういうプロセスがあったのかなというふうに思いました。

徳永：そうですし、それから言葉も、口から話す言葉ですけど、読んで頭で構築する言葉より、話して感じる言葉は脳のどこか違う部分にきっと入るようです。療養所に行ったときに一番びっくりしたのは、「徳永さんの鳥取弁が懐かしい、何でもええけえ、話してみて」というような、そういう言葉感ですよ。だから言葉の肌触りの中に故郷というのを感じるというのがあって、言葉は脳で読んで感じる言葉と別のものを持っている。直接現場に行くとその人たちが話すと、ハンセン病の差別の問題をおっしゃるといふのと、またちょっと違ったところで言葉がやり取りされるというのがありますね。

「故郷」という有名な曲があって、これは鳥取の観光名所でも流れる。長島愛生園で盲導響という、盲人の人の案内のために盲導響から流れてるのが「故郷」であることが多いんですね。盲導響で流れてると「兔追いし彼の山」、「いつの日にか帰らん」みたいなのがばちっと合うわけですね。ところが、作曲家の岡野貞一は鳥取の人ですが、あの曲を鳥取で流してるとちょっと意味がないなというのは前から思っていました。なぜかという「故郷」を歌ってる人は、鳥取以外のところで鳥取のほうを見て、つまり異郷の地から故郷を向いて歌っているから、それを故郷にいる人が歌っては意味が違うなみたいな

ことを感じました。郷土愛って何か、あるいは「故郷」はどこで歌われてる曲なのかということが心に残ってますね。

大野：言葉の中に故郷やふるさがあるというお話、興味深いですけども、『思想の科学』に書かれたエッセイ<sup>19)</sup>の中でご自身の故郷のイメージということを書かれておられます。例えば故郷を離れて京都大学に入った中で鳥取のイメージであるとか、京都、大きな都市との距離感とか、あるいはご自身のアイデンティティーみたいなものを振り返るような経験はしばしばあったんでしょうか。

徳永：鳥取以外のところは憧れがありましたからね。そこにいるだけでちょっと高揚する感じがして。怒られるわ、鳥取の人に。東京に行くと、さらに、今東京にいるんだみたいな感じになったり、海外に行くと、ワシントンはやっぱり違うわみたいな、何か自分の中の土地に対する差別的なものがあるんかと思うんですけどね。でも、郷土愛ということを行いながら、実際どこ愛でも結局いいんだと思うんです。地球愛で本当はいいんでしょうし、宇宙愛でいいんでしょうけれど。私が京都好きで、お金がないから夜行列車で6、7時間ぐらい、京都から鳥取に着くんですね。懐かしい鳥取に帰ったときは、また別のうれしさなんですよ。都から田舎に帰ってきたのに、やっぱり鳥取は違ううれしさがあって。そのうれしさを感じる時にハンセン病の人は、鳥取から夜、貨物列車で岡山のハンセン病療養所へ収容されていくという図がぱっと頭の中に出るわけですね。故郷っていいところだって自分が思っている、まさにそのときに故郷から連れ去られた人がいるという、そのことにちょっと衝撃を受けるわけです。ほんで、自分に関係づけて思うと、故郷が好きなら好きなほど、そこを出た人は一体どうなんだろうというのが大きな問題だと思って。郷土愛という言葉を使うときに、そこを去らされる人たちがあることが郷土愛の裏にちゃんといつとらんといかんというのがあって、自分だけがふるさは懐かしいでいいわじゃ済まん。

番匠：徳永先生、大変お忙しいなか時間を割いてお話いただきありがとうございました。

追記：紙面の都合上、野の花診療所での地域医療の  
実践やこぶし館でのイベントなどインタビュー内容  
の多くを割愛せざるを得なかった。割愛した部分に  
ついては、別の機会に公開を考えたい。

## 【注】

- 1) 濱崎洋三 (1936-1996) 鳥取市生まれ。1955年に京都大学文学部入学、卒業後1960年より鳥取県立鳥取西高校の教員となる。1969年より鳥取県の県史編纂室の主任となり、県史・市史・鳥取藩史の編纂に尽力した。主な著作に、濱崎洋三『伝えたいこと』定有堂書店、1998年。
- 2) 笹川財団は、WHOとともに世界中のハンセン病患者に無償で治療薬を配布している。中村哲とペシャワール会は、市民運動をベースにパキスタンでの医療活動を開始し、山岳部におけるハンセン病の治療に尽力した。
- 3) 徳永進『病氣と家族』集英社文庫、1996年、216-227頁。
- 4) 「ワークキャンプ」とは、FIWC (フレンズ国際労働キャンプ、Friends International Work Camps) が行う活動で、「様々な理由による生活上の問題や社会的な課題を抱える地域に行き、参加者が寝食を共にする合宿生活をしながら、地域の人々を交えた労働や交流を通して問題の解決を目指す」ものである。第一次世界大戦中にキリスト教フレンド派 (クエーカー教徒) が平和運動のために組織した民間団体に由来し、第二次世界大戦後にはアメリカフレンズ奉仕団 (AFSC) が来日し、原爆投下後の広島をはじめ各地で活動を行った。FIWCは、日本独自の組織として1961年に独立した。詳細は、FIWC関西委員会のホームページを参照 (<https://www.fiwckansai.com/>)。
- 5) 矢部顕 (1947-) 1965年に同志社大学文学部に入学し、1回生からワークキャンプ運動に参加した。1967年の交流の家竣工時のFIWC委員長を務めた。
- 6) 国立療養所長島愛生園。1930年に岡山県邑久町の長島に国立らい療養所として設置された。光田健輔が初代所長に就任し、無らい県運動のなかで強制隔離政策の維持・強化の中心となった。現在でも長島納涼夏祭りの際にはFIWCのちんどん隊が訪れ、交流をすすめている。
- 7) 1906年鳥取孤児院 (育児院) として創設された児童養護施設。
- 8) 鳥取県鳥取市浜村に伝わる民謡、漁夫の労働唄。
- 9) 飯河四郎 (1913-1990) 大連生まれ。奉天で家業の出版社と印刷所を手伝いながら、第一劇団の演出担当。横浜に引揚げ後に、中学校教員、中嶋製作所などで勤めた。1968年に奈良に移住し「交流の家」の無給管理人となり、脱走兵を置く運動にも協力した。
- 10) ハンセン病療養所の入所者数は、1931年のらい予防法制定時から急激に上昇し、1958年に1万1911人のピークを迎えたのち、1972年の沖縄の日本「復帰」により沖縄県の療養所入所者が加算されたことによる増加を除き、減少がすすみ2022年時点で1000人を切った。
- 11) このアンケート結果については、ハンセン病フォーラム記録編集委員会『資料集ハンセン病フォーラム それでも人生

にイエス、か?』FIWC関西委員会、2020年に掲載されている。この記録集には、ゲストに映画『あん』でハンセン病回復者の役を演じた樹木希林さんを迎えたシンポジウムの記録と、シンポジウムやアンケート自体に対する問題提起もおさめられている。

- 12) 木村聖哉、湯浅進、黒川創『鶴見俊輔さんの仕事①ハンセン病に向きあって』編集グループSURE、2016年を参照。
- 13) 古田恵紹 (1923~2001) 鳥取県日南町多里生まれ。郷土史家、元鳥取県立鳥取図書館長、元鳥取市民図書館長。国語教師として日野農林高等学校、八頭高等学校、鳥取西高等学校で教鞭をとり、鳥取県内でも言葉が通じない経験から方言研究に打ち込む。著書として『因伯俚言』1973年、『俗語・俗言・豆字引』1983年、『鳥取ことばは愉し—その特色』1983年など。
- 14) 大倭教は昭和20年8月15日、終戦の日に法主の矢追日聖が大倭教「立教開宣」をしたことにはじまる古神道の教派であり、1947年に活動の拠点を奈良市大倭町にうつし生活共同体大倭紫陽花邑が誕生した。交流の家は大倭紫陽花邑の敷地内に建てられた。矢追日聖『やわらぎの黙示 ことむけやはず』野草社、1991年を参照。
- 15) 柴地則之 (1941-1989) 三重県に生まれる。1960年に同志社大学に入学、安保闘争をへてワークキャンプ運動に専念。1962年から63年のFIWC関西委員会の委員長を務め、交流の家建設に尽力した。卒業後は、大倭紫陽花邑に入り、大倭新聞の創業や大倭印刷の設立、大倭病院の開設など次々に事業を起こした。
- 16) 『NAGASHIMA ~ 「かくり」の証言 ~』宮崎賢監督、2021年。
- 17) ハンパクについては、ハンパクプロジェクトメンバー「「ハンパク1969—反戦のための万国博」展示について」『立命館平和研究』21、2020年、83-96頁及び『立命館平和研究』掲載の一連のハンパク関連の聞き書きを参照。
- 18) 徳永進『隔離—故郷を追われたハンセン病患者たち』岩波現代文庫、2001年。
- 19) 徳永進「僕のなかの「ふる里」」『思想の科学』第6次5号、1972年、82-93頁。